

国際交流基金助成事業報告書

薬学部2年次生 東田優果

1. はじめに

この度、本学の国際交流基金の助成を受け、2018年8月18日～27日までの期間、カナダのバンクーバーを訪問し、薬学語学研修に参加したので報告致します。

2. 授業

バンクーバーではV I C (Vancouver International College)に通い、一緒に行った10人の先輩方や後輩と医療英語の授業を受けました。未習で聞いたこともない薬の名前が出てきたり、難解なテーマがあったりもしましたが、笑顔の絶えない、非常に分かりやすく楽しい授業でした。ホストファミリーが手に包帯を巻いておられたのを見て、どのような怪我をしたのか、どういった痛みかを聞き取った上で、「お大事にしてください」と英語で伝えることができたのは全て授業のおかげで、学ぶ意欲がさらに高まりました。



3. 施設見学

V I Cでの授業後には、先生と通訳の方のご引率のもと、様々な医療施設に見学に行きました。特に印象に残ったのは、ドラッグやアルコールの中毒で、仕事や住居を持たない人が社会復帰するのをサポートし応援するという、日本にはない慈善施設の存在でした。誰もが安心して過ごせる場所として解放されているその施設は、毎年3千人ものボランティアの協力によって運営されており、

無償で栄養満点の美味しい食事が提供され、社会復帰への意識がより高い人は寝泊まりすることもできると聞きました。“Helping without Hurting”（傷付けることなく助ける）という聖書の言葉をモットーにされているようで、以前その施設のサポートにより自立できた人も、過去の自分と同じ境遇の人々を救うために戻って来るなど、強い助け合いの精神を感じられた所でした。

4. ホームステイ

私がホームステイさせていただいた先は母子家庭の家でした。10歳の少年はお母さん思いの優しい子で、3人で水族館に行ったり夕飯の後にはゲームをしたりと、とても楽しく過ごさせていただきました。留学生を過去に何人も受け入れておられ、丁寧な英語で話してくださったので、拙い英語の私でも積極的に会話することができました。

一方で想像と異なっていたのが朝の過ごし方でした。カナダは日没や日の出が日本より遅く、私が登校する時間はまだお二人の起きる時間ではなかったため、音を立てないようにひとりで朝ごはんを済ませて、たまにお弁当を作り、飼い猫2匹に見送られて家を出る毎日でした。また、ハウスルーの紙には“シャワーを10分以内で浴びるように”と書かれており、おもてなし文化の強い日本と比べると、初めは「歓迎されていないのでは」と不安にもなりましたが、すぐにそれはただの暮らし方の違いであることが分かりました。バス停の場所が分からず道に迷ったことを話すと、バスマップを探し出して説明してくれるなど、本当に心優しい温かい家族でした。別れの朝には早起きして下さり、マグカップを頂きました。一生の宝物です。

5. おわりに

カナダに行くのも留学するのも初めてでしたが、素晴らしい9日間でした。夏のカナダは湿気も熱気もなく非常に快適な気候で、人々も親切な方が大変多かったです。道に迷ってもすぐに誰かが助けてくださったし、泥酔してバス停に倒れている人を、バスの乗客数人がわざわざ降りて救助している光景も目にしました。カナダでは薬剤師の待遇ややりがいも日本よりずっと上であることがわかったので、英語がもっとできれば今すぐにでも移り住み、カナダで資格を取って働きたいとさえ思いました。

共に行った10人とも放課後や週末に色々な話をしながら観光地を巡ることができました。人数の少ない単科大学なので、沢山の刺激や知識をもらい、仲良くなれた先輩方にこれからも会えることが大変嬉しいです。

貴重な経験をさせていただき視野も大きく広がった今、将来のための課題一つ一つに対して、慎重に積極的に懸命に取り組んでいきたいです。

